

枚張位の風鳶の糸程なる玄ゆる繩にて、接口をざつと結び置花だんに植穂共に土を懸末つば鉢を懸置、二月中頃見廻りて、夜中鉢を取、晝ハ又懸霜降様子なれば夜中も懸置、雨降らば雨に當一度に鉢を取らず、欺し取にすべし、芽出たる後下肥二三度懸べし、上方にてハ瓦にて焼たる末鏝程の鉢、竪に巾一寸計窓のごとく切抜たる鉢をかける、當所ハ寒氣強きゆへ末鏝鉢よし、正月末頃より右の窓明たる鉢を覆ふても吉、植替ハ九月初より二月迄吉、全くハ九月よし、

〔牡丹道老るべ^{廿六}〕一瘦木にてもあれ、俄に長せしめんとて、糞などつよくする事よろしからず、雨

の水取置て、日を経て少小便をませて、寒に入て根先とおもふ所にかぐるよし、總じて有つかぬ木に糞を嫌ふ、膠なども少ハよろし、

一^{廿七}寒を凌ぐに、馬糞を根にをく人あり、寒國の雪ふかき所にてハ、さもあるべきも、陽國にてはすまじき事也、寒中に疊の表を切合て、根もとをよく覆たるよし、やはらかなる藁を敷てもよし、寒強く土いてあぐる所ならば、わらのうへにひらみなる石など置てよし、木に霜覆する事よろしからず、木健ならず、さくはなもよはし、寒暑ともに少ハあつるよし、極寒極暑にハ、蘆簾をかけてよし、寒國にて大雪など凌ぐハ、格別の事なれば覆すべし、大雪に覆落て牡丹折る事ある事也、心得あるべし、

一^{廿八}木を洗ふ事、葉落て後、雨降に根のうごかぬやうに、柳の籠にて、苔を落すべし、洗ふて後、椿の實をください、布につゝみて油の出る程にしてぬぐふてよし、常の油にてもよし、木立うつくしくなりて、花なけれ共、一入搥と成物也、但さいくにつよくあらふハ、痛にも成べければ、心をつくべし、あらはざる木は無奇麗にて悪し、

一^{廿九}覆ハ、油引たる障子ハ移りよく、はなも一入ひかりありて、能見ゆれども、日氣油氣をとをしおかして、花痛事なれば、いかゞと覺ゆ、何の覆にても、高く仕たるハよし、はなにちかきハ悪し、遠